



作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

正反対の「美」のイメージ

大昔、ドイツで暮らし始めた頃、夏の戸外のレストランで、皆がわざわざカンカン照りの席に座りたがるのを見て目を疑った。私は日の当たる席などもってのほか。歩く時も道を横断してでも日陰に入るが、日本人女性にとって当たり前のその行動が、ドイツでは絶対に理解されない。ドイツ人はとにかく白い肌をこんがりと焼きたくてうずうず。少し日差しが強くなったと思いきや、まだ肌寒くても、皆、突然、真夏のような格好で飛び出す。長くて寒い冬の間、太陽を待ちこがれているとこうなるらしい。

ましてや真夏のプールサイドやビーチでは太陽崇拝は全開。日本人なら5分で嫌気がさしそうな炎天下で寝転がり、汗をかきながらくつろいでいる。しかも、私の目には苦行としか映らないこの習性は、皮膚がんが強く警告される昨今でもぶれない。彼らは、サンクリームをたっぷり塗れば、健康的な褐色になれると固く信じている。

ただ、メラニン色素が不足気味の肌はなかなかこんがりとはいかず、あっという間に炎症を起こす。それでも、無理して日光浴を何十年も繰り返すから、中高年女性の肌はしばしば、日



カンカン照りの席に座りたがるドイツ人（ハイデルベルク）

本人の目には惨状としか映らない状態となる。それを見て、私はさらに太陽を避けるようになったが、ただ、

ドイツ人に「なぜ？」と聞かれると、その理由を説明するのは面倒で、かつ結構難しい。なにしろ「美」のイメージが正反対なのだ。

日傘という便利なもの

日に焼かないおかげで日本人女性の肌は確かに美しい、と日本人の私は思う。たまに温泉に行って、小さな椅子にちょこんと座って身体や髪を洗っている人たちを眺めると、白くてピカピカの背中が目まばゆいほどだ。その肌に玉のような水しぶきが弾ける時、なんて綺麗なんだろうといつも感動する。

ところが、ドイツ人の美の判定基準には、胸の豊満さや背の高さは含まれていても、肌の艶やらキメ、ましてや白さなどは入っていない。日本人女性が好きなフェイスパックシートもドイツではほとんど売れない。それどころか、長年過酷に焼いてさめ皮のようになった肌は、毎年バカンスに行った豊かさを証明する勲章のようなものだ。

日本には日傘という便利なものがある。元は肌を焼きたくない女性のものだったが、最近は暑さ対策として男性も愛用し始めた。日陰を自分でつくるのだから、炎天下ではかなり効果的だ。私の周りの日本人男性の間では、「もう手放せない」とすこぶる評判が良い。

一方、ドイツでは日傘の習慣などないため、以前の私はドイツでは差さなかった。ところが、歳を取って図々しくなり、しかも、ドイツの夏も猛暑となってきたので、この頃は堂々と使っている。数年前まではジロジロ見られたり、「も